

得意分野を引き上げることで、 学力とやる気をさらに高める。

教師の顔と近所のオジサンの顔を使い分け、金丸先生は徹底的に生徒と対話する。本音を引き出さないと本当の進路指導も学習指導もできないと考えるからだ。

「高校は人生の通過点。パーキングエリアみたいなもので、適切な情報とアドバイスによって、生徒たちを“次”なる道へ送り出してやるための、とても大切な場所」と金丸先生。そして、そこでの教師の役割は、進路指導と、学習指導の2つだと考える。

まず適切な進路指導を実現するため、生徒一人ひとりと徹底して対話する。しかも、面談形式では本音が出てこないで、廊下の立ち話で、教師の厳しさと近所のオジサンの優しさを織り交ぜながら聞き出す。

「何となくでもその生徒が“やりたいこと”が見えたら、こんな道がある、こんな手があると、複数のキャリアプランを提示します。ただし、情報は与えず、今なら間に合うけれど、余裕はないよというタイミングを見計らって伝える。生徒に少し焦りが出てモチベーションもアップするので」

それができるのも、先生自身が日頃から大学入試の傾向、社会の動きなどの情報収集に余念がないからこそ。「でもそれは当然の“予習”。教師が“投げ球”をたくさんもっていないければ、多種多様な生徒に対し、瞬時に適切な指導は難しいと思います」

5年、10年後の生徒の成長こそ 教師にとって最大のリターン

学習面の指導は「出る杭を拾い上げる」が基本。「国語90点、数学20点ならまずは国語をあと10点アップさせ、数学はその後、考えようかと。得意分野を引き上げたほうが、伸びしろも広がるし、それが自信になる。勉強も楽しくなると思うので」

生徒の学力を伸ばすためには、教師の授業方法にも進化が必要だ。「シンプルに伝える授業を心がけています。1回の授業で“これだけは押さえて”というポイントが4つを超えると下手だなと反省。授業はまだ改善の余地があると思っています。もっとうまくなりたいです」

教師は生身の人間相手の仕事。反応がダイレクトに返ってくるライブ感が好きだ。「どんなに労力をかけても、どんな成果が出ているかも実はわからない。それでも、5年10年経って再会した時にちゃんと働いていたり、家族を連れていたりするとたまらなくうれしい。それが最大のリターン、教師の醍醐味をそこに感じています」

イケてる
センセイ!!
vol.15



取材・文 / いのうえりえ

山梨・私立甲斐清和高校
教諭
かねまる けんじ
金丸 貴臣先生 (49歳)

1965年山梨県生まれ。山梨・県立巨摩高校卒。本が好きで作家や編集者、図書館司書などを将来の夢と考えていた。早稲田大学卒業後、広告制作会社、東京都立高校非常勤講師、塾講師を経て94年より甲府湯田高校(現甲斐清和高校)へ。進学サポート委員会委員長などを経て14年度より普通科科長、生徒会指導部主任に。部活動は文芸部と中国武術同好会顧問兼任。iPadは校内で持ち歩き、生徒への学習、進路指導などに活用している。



昨年までの5年間、進学サポート委員会委員長を務めていた金丸先生。課外授業、補習授業、学習会など教育課程以外での生徒の学習活動を計画。写真は金丸先生が企画した進路ガイダンスの様子。

fan message



生徒のやる気、実力を飛躍的に伸ばす力をもつ先生です。私たち後輩の授業も時折見て感想を言ってくれます。金丸先生に見られていると緊張するのですが、それだけに褒められると大きな自信につながります。たぶん、生徒たちも同じだと思います。(甲斐清和高校教諭 佐野知徳先生)